去累代の善根に因りて景教に恭敬を生ずるに至るであらうと說き、

更に第三節（73—158）の第一段（73—137）には、岑穩僧伽が如何なる方便を以て道緣を漸修すべきであるかを問ふたのに對して、彌師訶は諸人の情態・行爲の弱點に關する十種觀を擧げ、之に對して身心を調禦し、言行相應ずるならば過失無いであらうといひ、併せてまた前の四種の勝法卽ち無欲・無爲・無德・無證の法を修すべきことを說き、第二段（137—155）には彌師訶が此の經の甚大の功德を說き、諸弟子諸聽衆等が天下に散じて此の經を行ふならば、能く君王の爲に其の國土を安護するであらうといひ、第三段（155以下）は岑穩僧伽が重ねて請問しようとするのに對して彌師訶がこれを制止した次第を以て終つて居る。

茲に全文を傳寫する。卷中には當時の慣用字體若しくは字畫の正しからぬものも少くないが、今は印刷の便宜上疑無い文字に限つて正しい字畫に復して置く。各行の字數はすべて原本に依り、五行每に記した數字は自分の加へた所である。

1 志玄安樂經　何方便救護有情

聞是至言時无上　彌施訶答言善哉

？河淨虛堂內與諸　生求預勝法汝復坐般神？

衆左右環遶恭敬侍　10 一切品類皆有安樂性隨？

5 伽從衆而起交臂　如水中月以水濁故不生影像如草中火以

我等人衆迷惑固　草濕故不見光明含生沈埋亦復如是岑穩